

ウェストール『海辺の王国』とホランド『顔のない男』における擬似父子関係

——父性愛と少年愛——

瀧 内 陽

英米 YA 文学のクィア批評¹では、『顔のない男』(*The Man Without a Face*, 1972) は多少賛否があるものの、真っ先に名前の挙がる作品の一つである一方、『海辺の王国』(*The Kingdom by the Sea*, 1990) は少年を性的搾取しようとする同性愛者がステレオタイプの描かれ暴力によって排除される作品として否定的に述べられることがあるにすぎない。しかし、『顔のない男』、『海辺の王国』はどちらも同性愛というより少年愛 (pederasty) を扱っているのであり、単純に同性愛を描いた作品として捉えるだけではなく、同性愛とともに描かれる擬似父子関係の分析を必要とする。しかし両作品とも書評は多いが研究は少なく、また、両作品の類似性も、指摘されてこなかった。本稿では、両作品で父性愛と密接な関わりをもって描かれる少年愛を分析する。

父親のいない14歳の少年チャックと、彼に頼まれ家庭教師を引き受ける47歳の元教師ジャスティン・マクラウドの交流を描いたイザベル・ホランド (Isabelle Holland, 1920-2002) の『顔のない男』は、ジョン・ドノバンの *I'll Get There. It Better Be Worth the Trip*, (1969) に続いて、アメリカで最初期に同性愛を描いた児童文学作品だといわれる。作者自身が同性愛を描いたと述べている (“Tilting at Taboos” 54-57) ののだが、作品自体は、恋愛感情という意味にせよ性的関係という意味にせよ、同性愛をテーマとしたというには曖昧すぎるものとなっている。

そもそも『顔のない男』は、同性愛を描いた作品である以上に、擬似父子関係の絆の強さを描いた作品だ。ホランドは始めから同性愛を描くつもりではなく、ただ父親の愛情を必要としている少年を描こうとしたのだと言い (“Tilting at Taboos” 54)、マクラウドとチャックの関係も、特にマクラウドの側からは、常に擬似父子関係という側面が強調される。また、性的な体験は、泣きじゃくるチャックをマクラウドが懐抱する中で ‘The golden cocoon had broken open and was spilling in a shower of gold’ (147)² と表現されるのみで何が起きたかはっきりせず、さらに、これ以前の状況を含めて語り手のチャックは ‘He hadn’t done anything. I’d

done it all.’ (149)と、性的関係に対してマクラウドには責任がないことを強調する。

また『顔のない男』は、同性愛を描いた作品としては、同性愛を死や失業、孤独とつなげて描いている点や、同性愛者をステレオタイプの描いた点が批判を受けるものとなっている³。同性愛者であるマクラウドがなぜか結末で突然死んでいる点や、同性愛者の人生が不幸なものとして描かれている点が批判を受けたことに対し、ホランドは、当時はゲームーブメントのはじまりの頃で人々が敏感になっていたからだと述べるが (“Holland with Rollin” 48)、この種の批判は後々まで残っており、無視できない。また、『顔のない男』のマクラウドの人生は確かに不遇であり、これにはホランドの同性愛を社会的なタブーとして見る見方⁴が影響していると推測できる。

しかし、この作品の、チャックとマクラウドの関係への過度の配慮は、むしろ同性愛以上のタブーに触れているために起きていると考えられる。マクラウドは全寮制私立学校の教師であったときに、チャックと同じ年頃の少年を車に乗せて飲酒事故を起こし、2年間刑務所に入れられた過去を持つ。このことが推測させるのは、ただし決して作中で暗示されていないが、彼が少年と私的な関係、そして性的関係を持っていたのではないかということだ。つまり、マクラウドは同性愛者である以上に少年愛者 (pederast) ではないかという疑惑が生じる。

ホランドは、ドノバンの *I'll Get There. It Better Be Worth the Trip* がアメリカ的な同性愛の見方を描いたのに対し、『顔のない男』はイングランド的な同性愛の見方を描いたと述べる。イギリスで育ったホランドは、イギリスのパブリックスクール (全寮制私立学校) では、少年たちが紀元前6世紀のアテネの教師と生徒の間にあった恋愛の概念に浸されるが、性的関係は否定されると述べる (“Holland with Rollin” 46)。ホランドはここで師弟の間で肉体関係を持つ古代ギリシャ人を論理的な結論 (logical conclusion) をもつとし、性的関係を否定する現代のイギリスを不合理 (illogical) とする。

つまり、ホランドは古代ギリシャでみられた、教え導く年長者と導かれる十代の少年の間の少年愛 (pederasty) に対し非常に寛容な姿勢を示している。しかし、60年代、70年代の運動を経て、英米社会で同性愛は合法的に認められるようになっていった一方、少年愛者の性交渉は性的虐待として社会的に非難されるべき行為として認識され続けている。

マクラウドはチャックに何も求めはしない。そして、チャックがマクラウド

を愛していたことを自分で認めたときには、チャックに遺産を残して死んでしまっている。しかし、もしマクラウドがチャックを誘惑する素振りが少しでも描かれていたなら、あるいは2人の関係がはっきりとした恋愛関係になったとしたら、読者はどう感じただろうか。1972年でも、やはり児童文学としての出版は、危ぶまれただろう。

さて、ウェストール (Robert Westall, 1929-1993) の『海辺の王国』の戦時下を流浪する主人公12歳のハリーは様々な人々と出会い一時的な共同生活を営むが、最後に出会ったもっとも重要な人物マーガトロイド (マーガトロイドは途中からMr. M.と表記される。本稿でも以下Mr. M.) は、『顔のない男』のマクラウドに非常に似ている。どちらも、Mで始まる名字をもち、数種の動物を飼いながら一人で暮らし、登山を趣味とし、中等学校の教師であり、一定期間主人公の父親代わりを務め、主人公は彼が父親であったならと望む。ハリーのMr. M.との一番の思い出は、一緒に近くの山に登り滝壺で泳いだことだが、『顔のない男』にもマクラウドと主人公が勉強の合間に近くの山に行き一緒に泳ぐ印象的な場面がある。また、『海辺の王国』のMr. M.にも、近所の男の子を誘拐した嫌疑をかけられたあやしい過去がある。

Mr. M.はマクラウドと異なる点を探す方が難しい人物であり、これだけの類似は偶然では起こりえず、また、ウェストールが話題作『顔のない男』を読んでいた可能性は高く、Mr. M.とのエピソードは『顔のない男』を踏まえていると考えられる。『海辺の王国』のMr. M.のエピソードのテーマは、息子を失った父親と家族を失った少年の作る一時的な家庭であり、孤独な少年と父親世代の男の擬似父子関係をテーマとする点は、『顔のない男』と共通している。そのため、Mr. M.のエピソードが『顔のない男』を踏まえていたとしても、テーマの点からは不思議ではない。しかし、『海辺の王国』全体を貫く少年愛に対する姿勢を考慮に入れると、奇妙なこととなる。

『海辺の王国』では、終始、同性愛が否定される。物語の結末部で、再会したハリーの実の父親は、Mr. M.について‘I wonder if he’s married, ... Or if he’s one of that sort ...’ (210)と述べ、Mr. M.のセクシュアリティに疑問を投げかける⁵。ハリーはMr. M.は結婚していたが妻を亡くし、一人息子も戦死したことを告げ、両親を黙らせる。しかし、実は、結婚が異性愛者である証明にならないことは、この作品の中にはすでに、少年愛に対する強い嫌悪とともに記されている。

ハリーは物語の中盤では、兵士のアーチャーと仲良くなり擬似父子関係を築くが、そこにハリーに性欲を抱くマーマン伍長が割り込む。マーマンはアーチャー

とハリーが性的関係を持っていると考え、ハリーに性的関係を迫るが、アーチャーが助けに入りマーマンを殴り倒す。しかしそこで、マーマンの意図を明確にするまで突入を待ったと語るアーチャーに対し、マーマンは、‘He was jealous. Because he wants the same thing from you as me. Only he was scared to ask for it.’ (125) と主張する。アーチャーは激怒し、さらにマーマンに襲いかかるが、その後、次の会話がなされる。

‘I’d never have touched you, Harry. You know that. Not like he thought. It’s just his twisted mind. He thinks everybody is like he is.’

‘I know,’ said Harry miserably. ‘You’re a married man with a son my age.’

‘That doesn’t mean much,’ said Artie bitterly. ‘So is he. I feel sorry for his wife.’ (125)

ここに書かれているのは、擬似父子関係と古代ギリシャ型少年愛の区別の難しさだ。アーチャーとハリーの関係は、両者の了解するところによれば、純粋に父子の関係であり、友達だった。しかし、外部のマーマンから見た場合、2人は性的関係にあるように見え、そう主張されたときに、アーチャーには、反証ができない。そのために、アーチャー、そして作者は、マーマンを徹底的に悪者として描き、打ちのめし、否定しようとする。

アーチャーに見られるマーマンへの暴力的な強い反発は、セジウィックが言うところのホモソーシャルな関係を同性愛の関係とみなされたために起きるホモセクシュアル・パニックとみなすことができる。しかし、ここでの問題自体は異性愛同性愛関係なく小児愛 (pedophilia) の問題である側面が強い。児童への性的虐待の加害者の多くは、父親、叔父、教師など子どもの身近にいる大人だと言われている⁶。つまり、大人達の、親あるいは教師として子どもに注ぐ愛情と、小児性愛者の性欲に基づく愛情は、ホモソーシャルな関係と同性愛の関係同様、その違いをはっきりと証明することはできない。イギリスで、子どもへの性的虐待が社会的に周知されたのは、80年代のことだったといわれ、『海辺の王国』はまさに子どもへの性的搾取が議論を呼ぶ時代に執筆された。

ただし、児童に性的虐待を加える加害者の大多数は異性愛男性であるにも関わらず、同性愛者の教師が児童に害を為すという偏見が英米で見られ、同性愛者の教師に対する差別があったことや、また、男性教師の少年愛が英米のYA文学でたびたび描かれる題材となってきたことは無視できず、特に同性愛嫌悪と

いう観点において小児性愛や少年愛の問題を同性愛と切り離すことはできない。

YA文学の起源である『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye*, 1951)でも、主人公の少年ホールデンは男性教師との同性愛の可能性に、教師が同性愛者であるという確証はないのにも関わらず異様に怯えている。その影響下で生まれたアメリカYA文学『顔のない男』のチャックは、ホールデンと同じく同性愛に嫌悪と恐怖を感じている。ただし、チャックの場合、マクラウドが同性愛者である可能性にではなく、チャック自身がマクラウドに惹かれることに、つまり、自分が同性愛者ではないかという可能性に戸惑う。最後に性的な状況を経験したために幸福な擬似父子関係が終わり絶縁状態になるが、最終的にチャックはマクラウドを、どういう愛かは明確にされないが、愛していたことを認め、会いに行く。しかしそのときすでにマクラウドはスコットランドで死んでいる。

女性作家のホランドは男同士のホモソーシャルな関係を同性愛と混同されることに恐怖を感じず、さらに少年愛に対し寛容な思考の持ち主であったため、『顔のない男』は、師弟間の恋愛を否定することなく、チャックはホールデンと異なり、同性愛的側面をふくめ、代理父であり教師であったマクラウドとの関係を肯定的に認める。しかし、おそらく当時の社会の制約を受け、ホランドはマクラウドを殺すことにより、実際に両者が恋愛あるいは性的な関係に入ることを認めず、終始、擬似父子関係と同性愛の区別を曖昧なまま描いた。しかしその慎重で曖昧な描き方ゆえ、『顔のない男』は結果的に、父性愛と少年愛の区別のつけがたさをいっそう強調している。

一方、イングランド人男性であり、父親であり、教師であるウェストールはたとえ不合理であろうと、自分と息子や生徒との関係を脅かす、性的関係を伴う少年愛を認めるわけにはいかなかった。

ウェストールの作品には概して、父子や、男同士の絆を重要視し、その反面女性を蔑視し同性愛を嫌悪する、ホモソーシャルな欲望と女性蔑視、同性愛嫌悪の傾向が見られる。ウェストールの作品では、『青春のオフサイド』での30代女性教師と十代後半の少年の性的関係は、『海辺の王国』における少年愛のように否定されることがなく、またウェストールはたしかにデイビッド・リーズが“Macho Man, British Style”で指摘したように、エッセイ“Hetero, Homo, Bi, or Nothing”の中で、同性愛者を芸術家的な人間とするステレオタイプな見方をしていいる。しかし、そのエッセイの中ではウェストールは同性愛嫌悪をあらわしたわけではなく⁸、思春期前の男児すら女の子とつきあわないだけで自分は同性愛

者ではないかと疑うような、セクシュアリティを過大に問題視する当時の風潮を批判したにすぎない。

“Hetero, Homo, Bi, or Nothing”でウェストールが恐れているのは同性愛自体ではなく、男同士の絆を同性愛に読みかえる社会であり、ホモソーシャルな関係がホモフォビアに切断され、成り立たなくなることだ。ウェストールは少年同士が親密に接触したり、裸で踊ったり組み合ったり、友情を得るため張り合ったりしても、同性愛の疑いをかけられることがなかった、ホモソーシャルな関係が脅かされない古き良き時代を懐古し、何にでも同性愛の嫌疑をかける今の世の中では男同士の友情が育めないと不満を述べる(“Hetero, Homo” 114-115)。

このエッセイで挙げられた例は友情であったが、父と息子の関係においても、おそらくウェストールは同じ考えを抱いていただろう。つまり、ウェストールはまさにホランドが『顔のない男』で行ったような、擬似父子関係あるいは師弟関係に、論理的には分ちがたい、性的欲望が読み込まれることを嫌っている。

このことは、すでに見てきたように『海辺の王国』のアーチャーのエピソードにはっきりあらわれている。アーチャーとハリーの友情と擬似父子関係は、マーマンが少年愛的欲望をもって割り込んだために崩壊し、ハリーはまた一人旅を続けることになる。『海辺の王国』では、少年愛は擬似父子関係と両立しがたく、父子間の絆を切断するものとして描かれている。

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の場合、同性愛者らしき男性教師との絆は同性愛恐怖によって切断される。それを受けて『顔のない男』は、師弟間の同性愛を肯定することによって、師弟の絆が断ち切られることを回避した。しかし、ウェストールは、擬似父子関係を切断する少年愛恐怖を存続させたまま、擬似父子の絆を描くという非常に困難な作業を行う。

『海辺の王国』のハリーとMr M.のエピソードは、マーマンとアーチャーのエピソードの後に配置され、さらにMr M.には『顔のない男』の設定がほとんど受け継がれている。それにも関わらず、この話は少年愛を描いたものとして読むことが難しい。その原因は、ウェストール自身と同じく、18歳の一人息子を亡くした父親であるMr M.のどうしようもない悲しみと心の傷の大きさが描かれているためだ。

Mr M.はハリーと出会った当初から不審な行動を取る。しかし、Mr M.の疑わしき行動は、息子を亡くしたことから来ると説明される。山歩きの後泳ぐエピソードでは、ハリーはかつてそこでMr M.の息子が泳いでいたことを推測し、

Mr M.が望んでいるのは、‘to fill up a boy-sized hole inside himself’であり、それはアーチャーにしてあげたことと同じだと考える (192)。

『顔のない男』では泳いだ後、岩に寝転がって会話し、マクラウドが父親だったら良いという話になるが、同時にチャックはマクラウドに触れたいと思い、チャックは自分を同性愛者 (Queer) だと思うかとマクラウドにたずねる (120)。マクラウドは否定し、‘No. Everybody wants and needs affection and you don’t get much. Also you’re a boy who badly needs a father.’ (121)と述べるが、結末から読み返すと、ここでは父子関係の構築を望むことと同性愛的欲望が共存して描かれていることがわかる。

一方、『海辺の王国』では、泳いだ後 (192-193)、イギリスらしくお茶になり、隣り合い座って会話するが、そこでMr M.が話すのは、この辺りの羊飼いは孤児となった子羊がいた場合、子どもを亡くした雌羊を見つけ、死んだ子羊の皮を孤児の子羊につけて臭いをうつし、雌羊に子羊を育てさせるという話であり、息子を亡くしたMr M.と孤児のハリーの擬似父子関係が自然なものであることが強調される。当然、そこには性的な要素は描かれず、しかも、その直前の山頂のシーンでは、ハリーは家族を思い出し、Mr M.はおそらく息子を思い出し、二人とも泣いていたため、たとえ、『顔のない男』の登山後の水泳が擬似父子関係と少年愛関係の分かちがたさを描いていたとしても、たとえ、アーチャーの父性愛が少年愛と区別できなかったとしても、通常ここで少年愛を読み込むことはできない。

アーチャーのエピソードや『顔のない男』を思い起こさせる人物としてMr. M.を描いたウェストールは、父性愛と少年愛の区別のつけがたさを認めている。その上で、それを超える父性愛を描くことにより、父親の愛の強さを強調しようとした。しかし、ハリーとMr M.の幸福な擬似父子関係は、ハリーの家族が生きていたことが発見されたために唐突に終わってしまう。そして、最後にハリーの両親は、Mr M.に対して同性愛者の嫌疑をかける。ハリーはMr M.が結婚していたことを告げ、一応疑惑を否定しようとするが、アーチャーのエピソードで示されているように、論理的にマクラウドの少年愛疑惑を否定することは不可能だ。ウェストールは感情的なレベルでは、少年愛を打ち負かすほどの父性愛を描くことに成功したが、結局そこから少年愛の疑惑を排除することのできない現実も描かざるを得なかった。

ホランドは少年愛がタブーとされる社会の中で、分かちがたい擬似父子関係と少年愛を描いた。ウェストールはもはや、男同士の関係、擬似父子関係が、

同性愛あるいは少年愛の嫌疑をかけられることなしに、親密ではいられない社会の中で、なおも性的要素を排した擬似父子関係を書こうとした。そのため、ホルランドの『顔のない男』では、曖昧で慎重な描写やマクラウドの唐突な死から、少年愛を描くことと社会（あるいは児童文学）の規範との葛藤が読み取れ、ウェストールの『海辺の王国』では、性愛を排した擬似父子関係を描くための格闘とその困難さが浮き彫りになっている。

意識的に社会的タブーである少年愛を描いたホルランドと異なり、ウェストールが、父性愛と少年愛の区別のつけがたさを認めた上でそれを超える父性愛を描くという作業をどこまで意識的に行ったのかはわからない。また、ウェストールの作品に少年愛嫌悪が存在していることは確かだ。しかし、少なくとも、『海辺の王国』は、単純に同性愛者を暴力的に排除したというだけの物語ではなく、父性愛と少年愛をめぐる、より複雑な問題が読み取れる作品だといえる。

注

- 1 YA文学のクィア批評はまだあまり盛んでなく、主な研究書はCuseo, *Homosexual Characters in YA Novels*とCart and Jenkins, *The Heart Has Its Reasons*の2冊。
- 2 “The golden cocoon”は、121ページに既出の言葉で、マクラウドと過ごした幸福な夏休み全体を指すとみられる。児童文学では、概して性的描写は避け、暗示的な表現で何が起きたか示すことが多いが、それにしても、『顔のない男』の描写は非常に曖昧で抽象的であり、慎重さを賞賛するにせよ批判するにせよ、多くの批評家が指摘する点となっている。
- 3 Cart and Jenkins, *The Heart Has Its Reasons*にまとめられている。
- 4 Holland, “Tilting at Taboos”から読み取れる。
- 5 ただし、その直前にMr M.はお上品で自分達とは違う世界の間人だと述べる母親の台詞があるため、ここでMr M.が同性愛者ではないと主人公が主張したのは、物腰の優しさや知的さ（中産階級性）を男性同性愛者と結びつけるイギリス労働者階級の偏見に対するウェストールの批判とみることもできる。
- 6 コービー『子ども虐待の歴史と理論』参照。
- 7 コービー前掲書、およびRose, *The Case of Peter Pan*による。イギリスではアメリカに比べ性的虐待の認知と積極的な対処が遅れ、80年代以降も性的虐待の存在を否定する圧力がかかり続けたという。
- 8 イギリス児童文学においては、デイビッド・リーズ『テントの中で』(*In the Tent*, 1979)、エイダン・チェンバース『おれの墓で踊れ』(*Dance on My Grave*, 1982)など、80年代までにゲイの少年の青春を肯定的に描いたYA文学が存在し、1990年の時点ではすでに、リベラルで良識ある教育者は、異性愛であれ同性愛であれ、恋愛を肯定的に認める方向に10代の少年を導くべきだと認識がなされるようになっていく。もちろん、リーズやチェンバースが肯定的に描いたのは少年同士の恋愛であり、児童文学に

少年愛が肯定的に描かれることはほとんどなかったが。また、80年代以降はバックラッシュの時代であり、同性愛に寛容な教育に反対する反同性愛主義者は存在するが、“Hetero, Homo, Bi, or Notthing”を見る限り、ウェストールは異性愛であれ同性愛であれ、性的な事柄に保守的ではあるが、反同性愛主義者とまではいえない。

Works Cited

- Cart, Michael, and Christine A. Jenkins. *The Heart Has Its Reasons: Young Adult Literature with Gay/ Lesbian / Queer Content, 1969-2004*. Lanham: Scarecrow, 2006.
- Cuseo, Allan A. *Homosexual Characters in YA Novels: a literary analysis, 1969-1982*. Metuchen: Scarecrow, 1992.
- Holland, Isabelle. *The Man Without a Face*. New York: HarperCollins, 1972.
- . “Tilting at Taboos.” *Children’s Literature Review* Vol.57, 54-57.
- . “Isabelle Holland with Lucy Rollin,” *Children’s Literature Review*, Vol.57, 48-49.
- Westall, Robert. *The Kingdom by the Sea*. 1990, London: Egmont, 2002.
- . “Hetero, Homo, Bi, or Nothing” *Is Anyone There?* Ed. Monica Dickens and Rosemary Sutcliff, London: Penguin, 1978.
- Rees, David. *Painted Desert, Green Shade: Essays on Contemporary Writers of Fiction for Children and Young Adults*. Boston: Horn Book, 1984.
- Rose, Jacqueline. *The Case of Peter Pan: or The Impossibility of Children’s Fiction*. Philadelphia: University of Pennsylvania, 1992.
- Salinger, J.D. 1951, *The Catcher in the Rye*. Boston: Little, Brown and Company, 1991.
- ブライアン・コービー 『子ども虐待の歴史と理論』 萩原重夫訳、明石書店、2002年。